

校長の夏の自主研修

校長 濱田康助

1 エネルギー環境問題研修会（エコクッキング）に参加して

8月8日（金）に、日本教育新聞社、大阪ガス株式会社の主催で、地球環境とエネルギーに関する研修会が開催され、参加して来ましたので、簡単にその報告を行います。

今回の研修では、地球温暖化と二酸化炭素の関係に着目して、私たちの暮らし方を改善する様々な取り組みについて学びました。

地球温暖化については、温室効果ガスと呼ばれる何種類かのガスが大気中で増加していることが、その原因といわれています。そしてこの温室効果ガスの中で、二酸化炭素の増加が地球温暖化と強く関係していることが科学的にも認められており、二酸化炭素を減らす取り組みがこの地球温暖化への対策と考えられているということです。

大気中の二酸化炭素の増加と私たち人間の営みとの関連性は、産業革命以後のエネルギー利用の増加との相関関係から認められており、石油等の地下資源をもとに、熱エネルギーや電気エネルギーを得ることが地球温暖化につながることへの懸念から、原子力の発電利用が推進されてきたという経過がありました。

しかし、東日本大震災を契機に、原子力発電の持つ課題がクローズアップされるなかで、今後の私たちの二酸化炭素を削減する暮らし方等について、子どもたちへの指導が強く求められていると感じました。

エコクッキング

エコクッキングとは、身近な「食」を切り口として、「買い物」、「料理」、「片付け」などで、一人ひとりができる環境に優しい行動を考え、実践していくことの提案です。

エネルギー、水、ゴミ問題等を理解し、実践力を育てる取り組みで、環境教育として非常に有効な手法と感じました。

「買い物」では、旬の食材、フードマイレージと地産地消など

「料理」では、ゴミの問題、エネルギーの有効利用、
ガスと電気の効率よい利用

「片付け」では、水の無駄や水の汚濁の防止など
調理実習を通していろいろと学ばせていただきました。

私が調理実習を一緒に行ったグループでは、調理時に出したゴミが6グループの中で最も少なかったです。これは、食材を無駄なく使おうとした「もったいない」の気持ちが良かったようです。

これからも、無駄をなくし、ゴミを減らす工夫、資源やエネルギーを有効に利用するなどをしっかりと心がけていきたいと思いました。

一人ひとりの取り組みは小さくても、実践していくことの大切さを改めて学んだ一日でした。



2 「むこっ子サマースクール 2014」に参加して

夏休み中の8月19日・20日に、西武庫公園の「ゆめハウス」を会場に、「むこっ子サマースクール 2014」（主催 市民運動武庫地区推進協議会）が開催されました。

19日は、木工教室や金属加工、万華鏡作りなどを武庫之荘総合高校の先生や生徒さん、また、武庫地区の西武庫公園ホテルの会、むこっ子ロード整備実行委員会、武庫東婦人友好会のみなさんの指導の下で行いました。また、その折に、人と自然の博物館から移動博物館「ゆめはく」にも来ていただくことができ、博物館の展示の一部を見せていただきました。



博物館からは、二人の研究員（鈴木研究員、古谷主任研究員）が指導においでくださり、展示物のお話をうかがったり、レプリカ作りを体験させていただきました。

アンモナイトのレプリカ作りは、2種類のアンモナイト（オルソスフィンクテス、リエリセラス）の型を利用し、熱で柔らかくなる樹脂を使って作るというものでした。



レプリカ作りに先立って、アンモナイトについてのクイズやお話をしていただき、アンモナイトが恐竜たちが生きていた時代に海に生息していた固い殻のある生き物であることや化石の標本を使って体のつくりを説明いただきました。子どもたちも楽しい時間を過ごしていました。

《クイズ》

アンモナイトは、現在生きている次の生き物（①イカやタコ ② ヤドカリ ③ カタツムリ）の中で、最も近い生き物はどれでしょう？ わかりますか？

兵庫県立人と自然の博物館（三田市）では、この夏（7/19～11/3）を中心に収蔵コレクション展「人と自然の博物館が保管している貴重な資料などを展示する」を行っているそうで、今回の収蔵コレクション展のテーマは、「ゾルンホーフェンの化石 ～1億50

00万年の記憶～」だそうです。

◎ ゴルンホーフェンの化石について

ゴルンホーフェンとは、ドイツの南部の街の名前で、この街では、古くから家などの建材（通路などの化粧石として利用される石）が採石されてきました。石の種類としては、石灰岩のなかまで、薄く板状に割れることから石版石灰岩と呼ばれています。

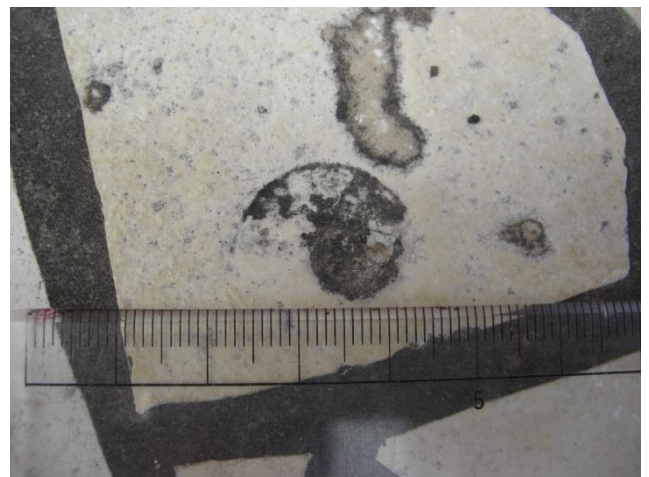
ゴルンホーフェンの石版石灰岩は、今から1億5000万年のジュラ紀後期にできたと考えられており、ここからは非常に保存状態の良い化石（始祖鳥、アンモナイト、イカ、エビ、カブトガニ、魚類など）が産出されることで有名です。

私たちの身の回りにも、このゴルンホーフェンの石版石灰岩を家の建材として使っていることが多く、また、化石を発見することも多いようです。古谷研究員にご指導いただき、本校の近くのお家でも、化石が見つけれられましたので、ここに紹介します。（写真）



この写真は、車庫の通路に使われていた石版石灰岩に見られるウミユリの化石です。

この2枚の写真は、家の壁材や通路に使われていた石版石灰岩に見られたアンモナイトの化石です。



3 富弘（とみひろ）美術館を訪ねて

みなさんは、星野富弘（ほしの とみひろ）さんをご存じでしょうか。

私は毎年、夏に小旅行をします。今年の夏は、これまであまり行かなかった北関東を訪

ねました。

私は、中学校の理科の教員だったので、旅行中にはその地方の自然に関することを科学館や博物館、資料館等を訪ねて学ぶように心がけています。しかし、今回は宿泊した宿のご主人から「富弘美術館」のことを教えていただき、訪問してみることにしました。

星野富弘さんは、1946年に群馬県に生まれ、群馬大学教育学部体育科を卒業後、中学校教員とされました。しかし、その年クラブ活動（体操部）の指導中に頸髄を損傷され首から下の自由をなくされました。失意の中で治療、リハビリを続ける中、口で筆をくわえての絵や文章を書き始められ、それらの作品「花の詩画展」が国内のみならず海外でも大きな感動を呼び、現在も詩画や随筆の創作活動を続けておられます。

今回訪問させていた美術館は、2005年に新館として9年前に開館した白を基調としたモノトーンの素敵な建物でした。

館内は、柱や通路といったものはなく、いくつかの円形の部屋がつながった造りで構成されていました。作品はテーマごとの部屋の壁面に展示され、緩やかな曲線の連続で作品を鑑賞するようになっていました。

私は、作品を見終わったとき、星野さんが怪我による生きることへの絶望から、生かされている自分への気づきと新たな自分の使命感、更には生きる意欲へと変化する様子が美しい絵や飾らない言葉で表現されていることに、強く感動しました。

館内で印象的だったのは、あちらこちらで、目頭にハンカチを当てながら作品に見入っておられる方がいたことです。

私も今年度還暦を迎えますが、自分のできることを、自分に与えられた役割を果たしていくようこれからもしっかりと生きていこうと思った次第です。

以上

